

腰痛を治すへいからさん (福島)

日本国中で戦がおきていたころ、福島ふくしまの岡山にあった城では、敵対する近くの城をほろぼして、一安心ひとしていた。

そこへ新たな敵が攻めてきた。油断していた岡山岡山の城はひとたまりもなく、あつという間に落城した。

そのとき、一人の武者がかるうじて城を抜けだし、やつとのことで平唐山へいからやまにたどりつきました。

「のどがかわく。水を……、水をくだされ……。」

地元の村人たちがそれに答えてお茶を差し出しました。

傷の手当てもしようとなりましたが、どうにも深手かかで、手のほどこしようがありませんでした。

落ち武者は、とぎれとぎれに言いました。

「ありがたや。お世話になり……。山すその木の根元にも埋めて……。さすれば、腰いたを治して……。」

村人たちは顔を近づけて聞きましたが、よく聞き取れませんでした。

ほどなく、落ち武者は息を引き取ってしまいました。村人たちは亡骸なきがらを平唐山の山すそに埋めてやりました。

ちよつとした石を探してきて、その上にのせて印にしました。お茶を竹筒に入れて供え、ねんごろとむらに用ったのです。それから、村人たちはことあるごとに手を合わせて拜おがんでいました。

しばらくすると、ふしぎなことが起こっていました。

「このごろ腰いたが楽になったなあ。」

「うちも、そうなんや。」

「うちでは、お父さんとお母さんも腰が楽になったというてる。」

「みんなそろって腰いたがよくなるとは、ふしぎなことじゃねえ。」

よくよく考えてみると、あの落ち武者をとむら用ったころから、村人たちの腰いたがなくなってきたようなのです。

「あの時落ち武者が『腰いたが……』といていたのは、きつとこのことだったに違いない。」

「世話になったお礼に腰いたを治すという意味だったのか。」

村人たちはたいそうありがたがり、お礼参りをしました。お茶やお菓子もお供えしました。

その後村人たちは、ここを「へいからさん」と呼び、大切にしました。

この「へいからさん」は、御利益ごりやくがあると遠くにまで伝わり、神戸や有馬、丹波の篠山や氷上からもお参りの人たちがやってきました。

腰いたに悩む人は竹筒にお茶を入れて供えて、「へいからさん」に腰いたが治るようお願いをします。そして、腰いたが治ったらお礼に小さな鉄の鳥居を供え、お礼をしたのです。

今でも、腰いたが治ったお礼参りの鳥居がいくつものこっているということです。

